15 オピニオン 13版 2021年(令和3年)3月18日(木) 朝日新聞 第3種郵便物認可

社会季評

東畑 開人

とうはた・かいと　1983年生まれ。臨床心理士。十文字学園女子大学准教授。著書「居るのはつらいよ」で大佛次郎論壇賞受賞。

連鎖する孤独

支援も連鎖しつながろう

先月、内閣官房に「孤独・孤立対策担当室」が設置された。英国の「孤独担当相」の日本版だ。誰も信じられなくなった孤独な大臣が、氷で覆われた執務室で悲しそうにハンコをついている。ついついそんなSF的な風景を想像してしまうのだが、これはシリアスな政策だ。

背景にあるのは、つながりの希薄化だ。私たちは今同じマンションに住んでいても、お互いのことを知らないし、むしろあまり知りたくない。無理やり誰かと付き合うのは面倒くさい。元気なときはそれでいいのかもしれない。自由だし、楽だ。だけど、ケアを必要とする高齢者や子ども、障害者、生活困窮者は、それだと孤立してしまう。そうやって付き合いがなくなり、孤独になると、自殺やうつをはじめとした様々な心身の問題が引き起こされる。これに国家が本腰を入れて取り組もうとしたのが、英国の孤独担当相であり、わが国もそれに続いた。

違和感を持つ人もいるかもしれない。孤独は良きものではないか。そういう声が聞こえてくる。実際、五木寛之の著書「孤独のすすめ」をはじめ、孤独の豊かさを説く本は少なくない。わずらわしい人付き合いから離れ、自分と向き合う。すると、個が磨かれ、成熟がもたらされる。そういう立場からすると、政府が孤独という内面的でプライベートな問題に介入することには疑問符がつくことだろう。

ここには誤解がある。確かに「豊かな孤独」も存在するのだが、それは心の中に安全な個室があることを前提としている。その個室に入り込めば、ひとりで安らいでいられる。そういう孤独を持てる人は幸運だ。しかし、孤独な大臣が対策を練っている孤独は違う。

たとえば、不登校の子ども、ひきこもりの青年、孤立するシングルマザー、老いたホームレス。彼女彼らは外から見ると、ポツンとひとりでいる。だけど、彼らは心の中では暴力的な声に脅かされている。「お前は迷惑だ」「無価値だ」「気持ち悪い」。彼らの心の個室には暴力的な他者が住んでいる。この「暴力的な孤独」こそが問題だ。

ならば、なぜ心に暴力的な他者が住んでいるのか。それはかつて、暴力を受けたからだ。虐待やDVがあったかもしれないし、学校や職場でいじめやハラスメントがあったかもしれない。その被害の体験が、彼らの心に暴力的な他者を残す。

いや、そのようなわかりやすい暴力だけが問題ではない。社会にはひそやかな暴力が吹き荒れている。たとえば、失職し、ハローワークの窓口に並ぶとき、「お前は迷惑だ」という声が聞こえてくる。誰かが直接言ったわけじゃない。それは失敗したときに自己責任を問う私たちの社会そのものの声だ。希薄化したつながりとは、何かあれば暴力的に放り出されるつながりに他ならない。それが心に暴力的な他者を残す。

「お前は迷惑だ」。失職した父親の心に暴力的な声が響く。それを紛らわすために彼は酒を飲み、家族に暴力をふるう。すると、その子は他者を拒むようになり、クラスで孤立する。孤独は連鎖する。だから、孤独は社会的課題なのだ。包摂性を失った競争的な社会は、人々の心に孤独をもたらす。その孤独が連鎖してその社会を壊していく。

つながりを再建しなくてはならない。そのために、多くの人が居場所や相談窓口を整備し、孤独な人へつながりを届かせようとしている。孤独・孤立対策担当室の設置もそういう試みだ。しかし、簡単なことではない。孤独はただつながりが提供されるだけでは解決されない。孤独の最中にいるとき、人は差し出されたつながりを拒絶し、自ら破壊してしまう。心の中の暴力的な他者のせいで、そのつながりが安全なものだと思えないからだ。だから、タフな仕事になる。彼らのおびえを理解したうえで、粘り強く関わりを重ねるしかない。心に安全な個室を再建するためには、長い長い時間が必要だ。

ただしこのとき、支援者は孤独になる。差し出したつながりを暴力的に断ち切られることが積み重なると、「自分は迷惑なことをしているのではないか」と思うようになる。氷に触れると手が凍る。孤独に介入しようとする人は孤独になる。だから、孤独対策は孤独な人の支援だけではなく、支援する人の支援もしなくてはいけない。母親にせよ、父親にせよ、一人では子育てができないのと同じだ。人間を相手にするためには、その裏で無数のつながりが必要なのだ。

孤独は連鎖する。だけど、私たちはつながりを連鎖させることもできるはずだ。そういう意味で、政府の中に孤独のための小さな部屋ができたのはよかったと思う。孤独は社会全体のバックアップのもとで取り組まれるべき問題なのだ。だから、孤独に対処しようとして孤独になった大臣が氷で覆われた執務室にひきこもることがないように、私たちはこの問題にまなざしを注ぎ続ける必要がある。孤独な人を支援すること、支援する人を支援すること、さらにその支援を行う人を支援すること。無限に続くこの連鎖こそが、つながりの再建だと思うのだ。

◆社会、政治などのテーマごとの「季評」を随時、掲載します。東畑さんの次回は6月の予定です。